

フランス人とスポーツ

小 副 川 明

昨年度の在外研究員として、筆者はおもにフランスに滞在していましたが、その間、やや予想外の結果が出た5月の大統領選挙をはじめとして、10月末には、まことに敬愛すべき楽人G・ブラッサンスが、この世の舞台からひそかに去るという悲痛な出来事などに際会しました。それらの事柄については、むろんこちらでも十分に報道されたこととしますので、ここでは、フランスのスポーツ事情という、わが国ではあまり知られていない一面について、見聞したことを誌してみます。

まず、フランス人とスポーツの取合せについて、おそらく怪訝な顔をされる方がいるかもしれないし、なかには、いったいフランスでスポーツが行われているのかという、素朴な疑問を抱かれる向きもあるでしょう。たしかに、現今のわが国のスポーツ熱に比べれば、それがフランス人の日常生活にかかわる度合では、到底その比ではないようです。われわれに最もなじみがふかい野球は、フランス人にとってまったく無縁のスポーツであり、たぶん、キャッチボールすら知られていないと思われます。公園でたまたま、子供たちがゴム球を地面に転がしながらやりとりをしているのを見かけたことがあります。その遊び方はむしろフットボールに由来するものでしょう。また、わが国のプロ野球のように、日々の勝敗にかかわるようなスポーツは何もありませんので、いたってのどかなものです。もし勝敗が気になるものといえ、まずは週末の多彩な競馬ですが、これは本筋から外れますし、射幸心にかかわる話なので、遠慮しております。

けれども、毎年6月の下旬からほぼ1カ月にわたって繰り広げられる、自転車によるフランス一周レースは大変な人気があり、その主力選手の名前は連日ラジオや紙上をにぎわせていました。朝からカフェで一杯やりながら、新聞片

手に激論をたたかわしている善男、時に善女に出会して、選挙の後でもあり、筆者はそれらの名前がなにか重大な政治上の人物かと思ったほどです。思うに、自転車こそはフランス人気質に最もよく合致したスポーツ用具かもしれません。なぜなら、性能のことはさておき、自転車はまったく人間の力のみが頼りであり、その速度は人間の感覚の閾を越えることがなく、しかも、あくまで個人としてしか関与しないのですから。もっとも、レースに対する一般の熱狂ぶりを見るにつけても、やはり、それが賭の対象になっているのは否めないところ です。

ところで、フランス人の根づよい個人主義はチームスポーツには向かないという通説があり、野球がはやらないのはそれが原因だとも言われますが、筆者には、野球こそはフランス人の運動神経にまったく適合しないスポーツのように思われるのです。たとえ筋力握力などが十分すぎるほどフランス人に備わっているとしても、一方で野球は大いに手先の器用さを必要としますから、その点で、フランス人にはきわめて苦手なものになると思います。フランス人の日常の立居振舞を見ていると、何かにつけて不器用さ、あるいは粗放さが眼につきま す。フランス人、もしくはフランス文化は繊細だとするこれまた通説がありますが、その繊細さは多くはその鋭敏な分析能力に起因するもので、これが言語表現や感覚の表出における差異として現われるものだと思います。一般のフランス人はかの名優ジャン・ギャバンのような、骨っ節が太い体質の持主が多いのです。

しかしながら、個人尊重のフランスでも、とりわけ昨今のフットボール熱はすさまじいもので、都市対抗の試合でも切符を手に入れるのは容易ではなく、ましてや各国対抗試合ともなれば、それは言うも野暮な有様です。それに比べると、ラグビー熱はまだ沸点には至っていないようで、おかげで、昨シーズンの最後を飾るフランス対ニュージーランド（オールブラックス）の試合を観戦することができました。

数年前にフランスからラグビーチームが来日して、当時の本学の選手たちも対戦しましたが、相当に手強い相手だったことを憶えています。その時、フラ

ンスの選手たちの出身地が、ボルドーとかトゥルーズのような南西地方に偏っているのに気がついたものですが、これはそもそもフランスにおけるラグビーが、ボルドー地方ヘワインの買付けに来ていたイギリス人との接触によって盛んになったといういきさつがあるようです。

さて、当日（11月21日）の切符をどこで買えるものやらよくわからないので、芝居の切符の要領で、とにかく、数日前にブローニュの森の南端にあるポルト・ド・サン＝クルーの競技場まで出かけてみた次第です。ところが、午後間もないのにかなりの人出で、地下鉄の駅からスタジアムへかけて、フランス国旗の三色を染め抜いた旗や帽子、襟巻などを売る出店がかなり並んでいます。なんとその夜が対オランダとのフットボールの試合日だったのです。競技場の周辺には、すでに機動隊の装甲車なども出動していて、何やらものものしい雰囲気、近くのカフェなどで尋ねてみても、たむろしている連中は当夜の試合の予想に熱中して、ラグビーの券のことなど一向に相手にしてくれません。結局、当日券で間に合いそうだということがわかり、引揚げました。

当日は同じく在外研究で滞仏中の桜井教授と、かつてラグビーの選手だったという、出張中の某建設会社の社員氏と三人で出かけました。例の出店で例の三色のタオル地の襟巻（約400円）をそろって買い、意気込んで切符売場へ直行しました。案ずるほどのこともなく、切符はかんたんに買えました。観客のほとんどが当日券だったようです。中の上くらいの席で、3,500円ほどです。スタジアムはまさに楕円形で三層をなしていて、慣れないうちは吸込まれそうな感じです。たぶん6万人くらいは収容できるのではないかと思います。試合前からスタンドのあちこちで爆竹がはじけ、歓声があがり、まことに陽気なものです。やがて、パリ警視庁の楽隊による華麗な吹奏行進があり、その後で、われわれにもおなじみの、オールブラックスによるマオリ古来のウォークライ（戦闘前の雄叫び）が見られて、なつかしい気分になりました。試合開始の3時頃にはほぼ満席になり、試合中の観客の野次、ラッパや口笛のかまびすしさは、とてもわが国の比ではありません。別に恩義があるという訳でもありませんが、判官びいきということもあり、われわれは立上って、「それゆけ、

フランス」と応援しましたが、さすがにオールブラックスは強力で、結果は6—18でフランスの敗け。しかし、タックルのひびきがそのまま伝わってくるかのような、見ごたえのあるいい試合だったと思います。

最後に、フランスにおけるスポーツといえば、ウィンタースポーツを逸することはできません。とりわけ自転車に似て、やはり個人の力量のみにかかわるスキーは、すぐれてフランス人の好尚にかなうものであり、筆者自身、雄大なアルプスカピレネの山坂で試みることを夢見ていましたが、それが果せなかったのは心のこりでした。